

## 第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

### 報告書資料 一般 - 86

学校名・団体名	豊岡市立田鶴野小学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	予測困難な時代を生きぬく力と生き方を子ども達に

#### 〈活動・研究の意義および活動報告〉

変化が激しく予測困難な社会を生き抜く上で必要とされる資質・能力を「自立する力」「学ぶ力」「未来を創る力」「人とつながる力」「課題を解決する力」と設定し、ふるさと学習を柱として、その育成に取り組んだ。

また、変化の激しい時代においては、一つの価値観にとらわれるのではなく、多様な人との関わりの中で、自分の生き方、働く意義、学ぶ意義などについて考え、自分なりの納得解を持ち、学び続けていく必要がある。多様な地域人材の力を活かし、「自分の大切な命を、どのように使うか、どう生きるか」を考え、議論し、自分の言葉で発信することで実践力を培った。

#### ①ふるさとの課題に挑戦する探究的学習（3～6年生）

本市では、3年生以上でふるさと学習に取り組んでおり、ふるさとへの愛着が高まってきたが、ふるさとの課題を自分事として考え、その解決について行動するところには至らないという課題があった。そこで、「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」という学習の一連の流れを大切に進めた。特に、子どもたち自身を学びの当事者、問題の当事者に位置付けるために、課題の設定場面を工夫した。例えば4学年では、豊岡市の産業について学習を行うのだが、魅力を知ることがゴールとするのではなく、豊岡市の抱える人口減少問題の解決策を考え行動することを目標として設定した。豊岡市役所でU・Iターンの担当職員の方を講師に招き、豊岡市の素晴らしさと同時に、豊岡市の人口問題の現状を子ども達に提示した。「世界に自慢できるほどの私たちの町が、30、40年後には人口が3万人も減ってしまう」「今ある暮らしや町のにぎわいがなくなってしまう」という驚きや危機感が芽生えたことで地域社会の問題を自分事として考える姿が見られるようになった。

生産量日本一の鞆の町であることを多くの方に伝え、豊岡市の魅力を知ってもらおうと話し合った。市内有数の観光地・城崎温泉で観光客に直接会って、豊岡の鞆の魅力を伝える学習を設定し、実際の鞆工場への取材やパンフレット等の作成などを進めた。

6つのグループに分かれ、それぞれが一番効果的だと思うPR方法を考えパンフレットや紙芝居、チラシなどを作るなど、可能な限り、子どもたち自身に「自己決定」「自己選択」する機会を設け、子どもたち自身の「人とつながる力」「課題を解決する力」を育むように学習を進めた。

学習を進める過程で、「歌を作ってPRすれば印象に残る」というアイデアが子どもから生まれ、地域でご当地ソングの作成を行っている勝地哲平氏らに協力を依頼し、共に豊岡の鞆のPRソングの作成を行った。そして、作詞作曲を子どもたち自身の手で行い、「世界にはばたけ TOYOOKAのカバン」という曲を作り上げることができた。

12月には、城崎温泉で実際に観光客に声をかけ、豊岡の鞆の魅力を、歌やパンフレットなどを使ってPRする学習を行った。見ず知らずの大人や多くの外国人に、自ら声をかけ、時間をとってもらい、自分たちの言葉で、豊岡の魅力を伝えることは、決して簡単なことではなかったが、果敢に声をかけ嬉々としてふるさとの魅力を語る姿は、頼もしかった。「豊岡の鞆ってすごいな」「鞆のお店行ってみるわ」といった言葉が、観光客から続々と聞かれ子ども達は大きな達成感を得ることができた。同時に海外の観光客にはうまく伝わらない



「PR ソング作りの授業」



「観光客に PR」

という経験もし、「英語をもっと勉強したいと思った」という声が聞かれた。(講師謝礼⑥⑧ 消耗品費⑩)  
<課題を解決する力が向上>

5つの資質能力の中で、「課題を解決する力」の大きな向上が右の結果から読み取ることができる。それを通して、自分の言葉で説明する力(人とつながる力)や自己肯定感の向上(自立する力)にもつながっていることが考えられる。  
<その他にも>



事前事後アンケート結果(4学年の場合)

肯定的回答:「とてもあてはまる」「あてはまる」の割合

○地域や社会をより良くするために何をすべきか考えることがあるか(4年生)

28% →→ 76%

○豊岡市の魅力を自分の言葉で説明できる

40% →→ 92%

○課題解決に自分から取り組んでいるか

72% →→ 88%

○自分に良いところがある・人の役に立っている

36% →→ 56%

クラブ活動で、地域の写真家(井垣亮氏)の方と共に全校生の写真を撮影し、虹を描くという学習にも取り組み、課題を解決する力の育成を目指した取り組みを行った。

## ②「命が喜ぶ生き方」の実践～命をどう使い、どう生きるかを考え議論する授業～

多様な価値観が存在し、変化の激しい時代を生き抜くためには、モデルとなる様々な大人と出会い、その生き方について考え、議論し、自分なりの学ぶ意義や働く意義、命の使い方についての考えを持つことが必要ではないだろうか。地域社会が衰退し、他人との関わりが減少する中では、「学校は命の使い方をまなぶところ」として、その役割が期待されている。

まず自分自身の命の大切さを子ども達自身が実感するために、赤ちゃんとその母親を講師として招き(赤ちゃん先生)交流をした。赤ちゃんと直に触れ合い、母親から育児や出産の大変さを聞くことができた。併せて、自分の名前や出産や成長のエピソード等の聞き取りを行う学習をし、子ども達は自分自身の命が奇跡の連続で誕生し、育まれ命が続いてきたことを知り、自分の命の大切さを実感することができた。

そして地域の人材を活かし、多様な大人の仕事や生き方について学び、議論する学習を各学年で実践した。「人の役立つ仕事・社会に貢献する仕事」を中心テーマにし、各教科や道徳の中で、年間10名以上の講師(市役所職員・JA職員・プログラマー・水族館トレーナー・小売業・検査技師・幼稚園教諭等)を招き学習をすることができた。講師それぞれの多様な価値観に触れると共に、どんな仕事でも人の役に立ち、社会に貢献していることに、子ども達は気づいたようであった。(※講師謝礼①②③④⑤⑦⑨)



「赤ちゃんとの交流」



「講師と語り合う」



「地域社会で活躍する先輩の生き方に出会う」



子ども達の中には「自分も社会の一員であると自覚し、人と関わろう、社会に参画しようとする意欲」が高まっていることが読み取れる。「自分さえ楽しければよい」という幸せではなく、他人と関わり、社会の一員として役割を果たし、人に喜ばれることの中で得られる喜びや満足感が、自己肯定感や自己有用感につながるのではないだろうか。子ども達なりに、自分の生き方について考えを深めることができたようだ。

事前事後アンケート結果(6学年の場合)

肯定的回答:「とてもあてはまる」「あてはまる」の割合

○人の役に立ちたいと思うか

84% →→ 92%

○より良い地域にするために何をすべきか考えるか

38% →→ 70%

○「自分の思いを伝えられるか」

64% →→ 83%